

## 上田 穰先生を悼む

弔 詞

日本天文学会理事長

弓 滋

上田先生が病のため逝かれて一週日 今日ここにお別れせねばならぬことになりました 日頃先生の御指導をうけておりました私共にとって 悲しみ極まりない思いがいたします

顧みますれば 大正五年大学御卒業以来 先生は半世紀以上の長きにわたって 我国の天文学発展に大きな貢献をされました

この間 京都大学理学部宇宙物理学教室 或いは花山天文台 さらにまた緯度観測所において 位置天文学の理論と観測の両面にわたり 数多くの業績を残されましたが 先生のお仕事はこの分野にとどまらず 古代中国の天文学の研究から 南米ペルーの太陽コロナ観測所の設立にいたるまで 国内的にも国際的にも 極めて幅の広いものでありました その御活躍は 私共の忘れることのできないところでございます

また 日本天文学会において 戦前より戦後にかけての多難な折に 永らく評議員として 学会運営に指導的な役割を果されると共に 我が国で唯一の天文学研究の学術誌である 本会欧文報告の創刊にあたって 編集委員として尽力されました

欧文報告と著書 ( ) 内は共著者

A Mechanical Solution of Kepler's Equation: Monthly Notices of the Royal Astronomical Society, Vol. 87, p. 207, 1927.

Shih Shen's Catalogue of Stars, the Oldest Star Catalogue in the Orient: Publications of the Kwasan Observatory, Vol. 1, No. 2, p. 18, 1930.

Graphical Computation of Jupiter's Perturbation on Asteroids: Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series A, Vol. XVIII, No. 1, p. 41, 1935.

Beaded Eclipse Observed with Movie Cameras: Solar Eclipse Committee, Provisional Reports of Observation of the Annular Eclipse on May 9, 1948, p. 6, 1948. (S. Fujinami, F. Imagawa, T. Mitsuo)

The Effect of the Plumb Line Deviation in Longitude on the Observation of Occultations and Transits by the Moon: Publications of the Astronomical Society of Japan, Vol. 2, No. 2, p. 87, 1950.

Formulation of Lockyer—Halm's Relation of the Solar Activity: Publications of the Ikomasan Solar Observatory, Vol. 1, No. 1, p. 1, 1956.

The Character Figure of Calcium Flocculi: Ditto, Vol. 1, No. 1, p. 2, 1956.

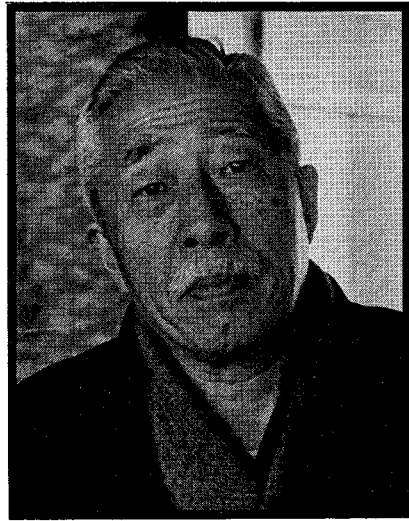
On the Measurements with the Sky Photometer: Ditto, Vol. 1, No. 1, p. 110, 1956. (M. Ishitsuka)

石氏星経の研究 東洋文庫論叢第 12 昭和 5 年

日食絛説 富書房 23

天体観測法 恒星社 24

自然科学読本 (長谷川他 5 名) 世界思想社 26



このような多彩な御功業にかんがみ 昭和三十七年先生は 日本天文学会の名誉会員に推挙されました 私共は 先生のご健康の少しでもすぐれ その齢の一日も永からんことをお祈りしていた次第でありますがいまや先生の温顔に接するすべのなくなったことは まことに痛惜にたえません しかし 先生の遺された志は 後に続くものに引つがれて 必ずや学問の華を美しく咲かせることと信じます

ここに 日本天文学会を代表し 先生の御冥福をお祈りいたします

昭和五十一年十一月二十日

ハレ一彗星をもう一度見るまでは生きるんだと常日頃執念を燃やし続けられた元気な先生も病魔には勝てず、昨年 11 月 13 日 84 歳の長寿を以てついに帰らぬ客となられた。あと 10 年は日頃の御様子から大丈夫とばかり思っていただけに何としても悔やまれてならない。

先生と私の関係は私が大学に入って先生の誤差論の講義を聴いた時に始まる。私はもともと数字いじりが好きで計算天文学に興味があったから将来は先生の御指導を仰ぎたいと考えていたものである。後期に計算法の講義が始まったが、計算器の話になって教室の黒板に大きな算盤が掛けられ「二一天作五」という割算の九々を使って算盤の講義を聴いた時は異様に感じたが、お蔭で後々までこれが役立っている。2 年に進むと私は当時助教授であった先生の隣室で、山本教授とは廊下を挟んで向い側に研究室が与えられて毎日両先生から監督を受けることになり、一日も勝手に休むことはできなくなったが、それだけに師弟関係は親密となって行った。先生とは下宿に帰る途中も一緒に過ごすことが度々あり道すがら教わることもあった。先生のお宅にもお邪魔するようになると、先生御夫妻はいつも私達を親しく迎えて下さったものである。

当時先生は学位論文石氏星経の研究中で毎日算盤をはじいて計算されていた。昭和 3 年私は大学院に籍置いてこれから少し計算の手伝いでもさして戴こうという矢先、先生の研究も一段落して翌 4 年 3 月米国へ留学されることになり、荒木助教授も 1 月にドイツへ留学に旅立れ、新城博士は総長に推されて教室は山本教授の独り天下となった。この年花山天文台の建物が完成し、9 月には移転も完了して花山の新館の山本教授の隣室に研究室を戴き、12 月に花山の宿舎に移り住むことになった。私は翌年 9 月に都合あって山本教授のもとを離れることになり、アルバイトをしながら憂鬱な毎日を下宿で過していた。6 年 5 月 23 日に帰学された先生は 8 月 8 日に教授となられ、秋から私は先生の隣りの元の研究室に通うことを許され、先生の指導下に計算天文学に専心できることになった。13 年山本教授が退職された後は花山天文台の担当、15 年生駒山天文台の創設など急に多忙な毎日となられた先生のお手伝い、私も花山・生駒の兼任を仰せつかって三か所を往復することになり、この間先生の信頼を一身に受けて研究・計算・観測から助手的雑用にまで多忙な毎日であった。昭和 9 年のローソップ、11 年の北海道、16 年の中国への皆既日食の観測にはその準備から荷物運搬・設営に至るまで一切を委せられ、ローソップ行きの時は年末の寒中帰宅するのは夜半過ぎで警官

に呼び止められたこともあった。北海道の日食では最初には私一人で観測地の選定のため派遣せられたが、本観測には先生・森川両夫妻と私の 5 人は観測所の傍らの民家を借りて、自炊しながら 2 箇月近く生活を共にした。11 月 22 日にはアインシュタイン効果の比較写真撮影のため先生と二人京都を出発したが、11 月下旬の夜明け近くの北海道では気温は零度にも達し、しかもその時刻に都合よく晴れるとは限らない。1 週間滞在中、田舎の寒中では見るところもなく、薪ストーブを囲んで世間話や研究の話に毎日を通した。こうして先生に直面して雑談していると、日頃温厚な先生も時には思わぬ冗談を真面目くさってとばされるので返答に困ることもあり、また先生特有の笑いをもらされることもあって、師弟の関係を離れて家庭的な親しみを覚えて少しも退屈を感じなかった。三回の日食観測は辛い仕事ではあったが、楽しい思い出となって蘇ってくるのである。昭和 12 年山本教授がペルーへ日食観測に行かれ、日本へ留学生を招く話がきまり、退職後留学生ダビラ君が来日したためその引受役が先生にまわってきたが、日常の世話は私に委ねられた。これが縁となって先生はペルーに太陽観測所建設のため奔走せられ苦勞も多かったようである。

先生の信頼のもとに毎日張りきって仕事できたのは全く先生御夫妻のお蔭で有難いことではあったが、昭和 17 年 3 月末日をもって一身上の都合で再三先生御夫妻の引きとめにもかかわらず、固辞して大学を去ったのである。先生に対して全く申訳ないことをしたものと今は懺悔の気持で一杯である。短い間ではあったが先生から受けた数々の御教示は今なお私に大きく影響を残しているのである。

先生は事に当って慎重で、そのためか余り書かれなかったようである。原稿なども期限ぎりぎりまで延されていった。孫引きをひどく嫌われ、原稿に目を通して戴くと一字一句訂正されたものである。一緒に計算していても、この慎重さのため中々先へ進まないものである。先生は一面謹厳なところがあったが、温情でいつも温かく迎えて下さり、先生から怒られたことはなかった。一度だけ私がこんな本を買いましたと申し上げたところ、先生はその本なら教室にも無いのだから何故自分に一言話してくれなかったかと聊か怒気を含んだ調子で言われたが、これは安月給でそんな高価なものを買わなくても教室の費用で買って上げたのにと、先生の温かい気持から出たことであった。一見しただけでは先生は気むつかしいように感ぜられるためか、先生の専門が位置天文学に片寄って現代の若い人に向かないせいか、少くとも私の在職

中は先生の研究室に集る者は少かった。

昭和 41 年 1 月鴛鴦夫婦といわれた奥様に長い患いの末、先立たれた先生は独り淋しく不自由な余生を送られることになった。その淋しさを紛らわすためでもあろうか、自宅内に天文台や茶室、弓場などを造って楽しんでいられたようである。

書き出すと思ひ出はつきないが、私は退職後の先生の公職上のことについてはよく知らないし、また語る資格もないが、上洛の折には必ず参上すると昔と変わらず心よ

く迎えて下さって話ははずんだ。背徳者の私をかくまで心にかけて下さった先生のお姿を拝することのできなくなった今、御存命中受けた先生の師恩の有難さを追想して一入感慨に耽るのであるが、先生には今頃はあの世で奥様と楽しい語らいに毎日を送っておられることと思うと、私の心も何となくなごむのである。今となっては先生の御冥福をひたすらお祈りするばかりである。

(昭和 51 年 12 月 14 日夜記す)

## 上田先生と小惑星ウエタ 三谷哲康

1944 年 5 月のある日、私は京大宇宙物理学教室に上田穰先生をお訪ねした。生駒山太陽観測所の観測員として就職するためであった。お話しをしたのはこの時が初めてであった。履歴書を見られてから「天文学はどんな勉強をしましたか」と先生にきかれて、私は何とかお答えしたように記憶している。先生はこの頃丁度現在の私の年齢 50 歳を少し越えておられた筈であった。一年間の生駒勤務の後、私は自ら申し出て、1945 年 4 月、花山天文台に転勤し、1956 年天文台を辞めるまで先生御指導の下に小惑星・彗星の観測を続けた。

1945 年 11 月 9 日、私は小惑星 (144) ビビリアの写真観測を行った。使用したカメラはクック 30 cm 屈折遠鏡に同架した、 $f=17$  cm のツァイス・トリプレットのツィン・カメラである。これが戦後初めての花山天文台の写真観測であった。真黒にカプっている古い乾板と何年前に購入したのか判らないような写真薬品、それに鉄錆の出る井戸水、ポーフラのいる雨水でスタートしたのであった。そのうち窮乏の時代も徐々に良い方へ向い、なけなしの研究費を割いて、写真乾板と薬品だけは買ってもらえるようになったのは上田先生のお蔭であった。

この頃、小惑星の推算表は少数のアマチュアが古い軌道要素から計算したものが少しあっただけであった。やがて学術研究会議によって、専門家とアマチュアが協力して計算した比較的明るい、かなりの小惑星の推算表が入手できるようになった。上田先生も京都大学を代表してこれに分担協力しておられた。1947 年以降になるとシンシナチとレニングラードの小惑星表が入手できるようになり、小惑星の観測も一応軌道に乗ったのである。

1953 年 10 月 11 日の昼間、私は 3 日前になくなった父の葬儀を行なったのであるが上田先生、その他の方々に御参会をいただいた。悲しみの中にあつた私は父の不幸にもめげず、その夜、望遠鏡を天空に向けて 2 枚の写真撮影したが、最初の方の原板の端近くに運命的な小惑星 1953 TA が写っていたことは、勿論ルーペで検索する迄知る由もなかった。続いて 13~16 日の毎夜、原

板には続々この予報にない 13 等級の小惑星の像が記録されていった。とりあえず、これはシンシナチの中央局に報告され 1953 TA の仮符号を与えられた。10 月 11 日~11 月 7 日の期間の 7 観測から古川駿一郎氏によって暫定的に長円軌道要素と追跡用の位置推算表も計算された。

結局 12 月 4 日迄追跡して 10 回の観測がなされ、古川氏によって翌年再び新要素が計算され数秒角程度に観測を表わされるようになった。その後、米国のゲーテ・リンク天文台の 6 個の観測を加えて 16 個の観測から、古川氏は 3 度、軌道決定を試みられ、かなり良好な要素が算出された。因みにこれは同氏の大学院修士課程の卒業論文であったので、上田先生の御指導の下に行なわれた訳であった。

この小惑星は 1955 年 3 月 29 日に再び衝になる筈であったが、3 月 16 日に花山で私によって 17 cm ツァイス・トリプレット・カメラで長時間露出の原板から幸うじて検出された。三鷹でも 3 月 16, 17 および 21 日の 3 夜、光度 14.5 等として観測された。又、ゲーテ・リンク天文台でも 4 回観測され、この小惑星は確認された。パトリー (ニース)、古川両氏によって、1953 TA とフィンランドのトルク天文台で発見した 1940 YI との同定が公表された。トルクでは 1940 年に 2 回しか観測がなく円軌道しか計算されていなかったもので、1956 年 6 月 28 日付の MPC 1449 によって、この小惑星が (1619) 番の永久番号をつけられるに及んで、命名規約 (MPC 837) により命名権は長円軌道要素を計算した観測の発見者たる私にあることになった。

当時京大で初めて発見されたこの星に「京都」と名付けることは、上田先生、私を含めて関係者の間では殆んど当然のように考えられていた。しかし、この小惑星の発見と確定に計算面で大きな貢献をされた古川氏から、恩師上田先生のお名前をつけてはどうかとの意見が出された。私はこれに賛成し、私の名前でもシンシナチの小惑星中央局に「(1619) 1953 TA の命名権が私にあるなら

ば、花山天文台の小惑星の観測と計算を指導された前台長上田教授を記念して、これに「ウエタ」(Ueta)と命名することを提案する」旨の手紙を送った。1957年のことである。

その後、何の音沙汰もなく、古川、長谷川(一郎)両氏と会った際に、もっと上手な表現でアピールしようということになり、英語の巧い長谷川氏に入れ智恵してもらって再度手紙を送ったことである。しかしその後数年間はなしのつぶてであったが、突然、上田先生から1965年8月8日付の御書簡をいただいた。先生には申し訳ないが、ここにその一部を掲載させていただく。

「拝啓

この夏は始めの内は寒い位でしたが梅雨が去ると急に

暑さがやって来ましてうだって終わりました。(中略)

さて2月15日付のMPC(2347)にUETA命名の記事が出ました。余り遅かったので一度聞いてやろうと思った矢先でした。貴君の御厚意に対して厚く御礼申します。

(英文略)

私としましては誠によい記念となりましたが一寸申訳ないような複雑な気持で一杯です」(原文のまま)

この数か月後に先生の最愛の奥様が癌でなくなられたのである。

1976年11月20日京都吉田の御自宅で、上田先生の告別式が行なわれたが、この日は私の第50回目の誕生日であった。合掌。

## ア ン デ ス の 上 田 先 生

石 塚 睦

昭和26年の暮近く、生駒山太陽観測所の教授室で毎週開かれる雑誌会の席上、アンデス山中に、コロナグラフを主体とする太陽観測所を作ろうという案が、生駒山の堀井講師から提出された。まだ敗戦の傷手が生々しく残っている、此の貧しい世情の中で、こんなに雄大な計画が果して実現出来るのだろうか、無鉄砲なさかりの私でさえ思ったのに、上田先生が其の案に示された御意欲は、並々ならぬものであった。

数日後の朝日新聞に此の計画が掲載されると、神戸市在住の塩田富三氏が多額の拠金を申し出られ、一方、ペルー国サンマルコス大学の、ラファエル・ダビラ教授に、共同観測所設立案が送られて、計画は推し進められることになったと聞いた。計画の中で働くことを憧れながら卒業した私に、上田先生は、生駒山で住むことを命じられた。

先生は、毎週金曜日の朝、生駒山においてになって、土曜日の朝下山なさり、其の間に、主に測光の基礎実験を課題として与えて下さり、それが次の金曜日迄の宿題となった。週一度の雑誌会に参加する為、宇宙物理学教室に向う以外に下山せずにおれば、宿題に没頭する以外に、先生の御計画に従って、堀井講師、辻村技官が、スペクトロ・ヘリオスコープや、太陽分光器を製作されるお手伝いをする時間もあったし、古いマイクロデンシトメーターの錆を落して、何とか使いものにならないかと、その改造を考える余裕もあった。又、K線に調整されたスペクトロヘリオグラフを、C線に調整しようとして、肝心のK線の撮影時刻迄に再調整が間に合わず、責任者の辻村技官に大汗をかかせる様ないたずらやしくじりを重ねることも出来た。下山すると厳しい顔をお見せになる上田先生も、其の様ないたずらは、笑って見ておいでになるだけだった。拡散面の反射能の測定などという、

極く初歩の実験にもかかわらず、気に入った結果が出なくて、夜明け迄実験室で時間を費していると、其の時刻迄お寝みならず、夜ふかしのおつきあいをして下さったことも再三だった。

やがて、先生は御退官になったが、私達はさして変化を感じなかった。宿題こそもうお出しにならなかったが、先生は、毎週金曜日には、必ず、観測所向いの天文博物館に、館長としておいでになったし、質疑に、それ迄と同様、明快な解答を与えて下さった。出来上った、手造りのスペクトロヘリオスコープを覗きにきて下さって、ほう、ほう、見えますね。こんなに小さな紅炎が、とても鮮明に見えますねえ、ほっほっほとお喜びになって、私達を嬉しがらせて下さりもした。

昭和31年10月末に、病床に奥様をお残しのまま、先生は、単身ペルーにお渡りになった。ペルー地球物理学研究所、アルベルト・ギーセケ所長から、同所々属ワンカイヨ観測所が、コロナ観測に適当であり、両国による共同観測を歓迎する旨の書信が届いたからであった。大阪工業技術試験所の岩田・足立両技官が製作された、試験用コロナグラフを携行された。

昭和32年5月、先生は、ペルーアンデス山中、マンタロー盆地にあるワンカイヨ観測所に於て、コロナ緑線が観測出来ることを御確認になり、将来、正式のコロナグラフを寄贈して、ペルー・日本の学徒の使用に供することを御約束になった上で御帰国になり、殆んど入れ違いに船出した私は、7月初旬から、同所で太陽観測業務に就いた。7月1日から、国際地球観測年の業務に忙殺される所員の間にも、近くのワンカイヨ市民の間にも、ドクトール ジョー ウエタへの崇敬の念が満ち満ちていた。老躯に鞭打ち、自ら器械を携行して、据付・観測を行い、帰国に際しては、器械を寄贈した上に、猶全退

職金を投じて、それを基金として、より完全な器械を作  
ってペルー国内に据え、ペルー国の科学の発展に寄与し  
ようという先生の御意図が、その国の人達の眼に聖者の  
ものと映ったのである。

計画の完遂の為に、上田先生の御志を引き継がれた清  
水疆先生の御尽力により、レンズ系は旭光学で、電子系  
は測機舎で、そして機械系はシンポ工業・友繁鉄工所で  
完成し、器械が、福知山市友繁鉄工所で、ペルーコロナ  
グラフ建造期成会から、ペルー国総領事に引き渡された  
のは、昭和 40 年 10 月 21 日であり、ペルー国関税法  
の改変から、通関が遅れに遅れて、器械が大統領代理か  
ら研究所々長に引き渡されたのは、翌昭和 41 年 9 月 25  
日であった。先生は、其の年 5 月に、再度ワンカイヨの  
土を踏まれ、器械の据付けが予定されている高原を御覧  
になって安心なさった上で、私達に互して、ワンカイヨ  
観測所内での仮据付家屋の鉄骨の錆落しをお始めになっ  
た。先生と肩を並べてサンドペーパーで鉄骨を磨く作業  
員達は、数日前に、オルデン・デル・ソール勲章という  
極めて高位の表彰の沙汰を受けた神様の様な人の手を錆  
に染めさせている私に非難の眼を向けた。

## 人 間・上 田 先 生 辻 村 民 之

昭和 23 年の春まだ浅い頃、生駒山太陽観測所にいた  
学友の山本敏文君から、自分が辞めるので後任に来てく  
れないかと誘われ、宇宙物理学教室の上田教授をお訪ね  
した。あれから約 30 年、観測所時代から天文博物館と、  
生駒山が好きであった先生には、公私にわたって長くお  
世話になった。お葬儀のお手伝いをしながらも、遺された  
数々の書物や、写真、器械類を整理させて頂きつつ、  
思いつくままに先生を語ってみた。

生駒山太陽観測所は、先生の太陽常時観測に対する深  
い情熱によって、関西急行鉄道（現近畿日本鉄道）の好  
意をうけて、昭和 16 年 7 月 9 日竣工した。先生御自慢  
の三角帽子の太陽塔がそびえる建物は、標高 640 米の生  
駒山上にあって、仲々瀟洒なもので奈良盆地から、大阪  
平野から望見出来る。

アスカニア製スペクトロヘリオグラフを設置した分光  
観測室は、絶対禁煙という先生の厳命、見学者や来客の  
喫煙に気をつかったものである。電車やケーブルカーの  
中でも、禁煙の標示があるのに、喫煙している人があれ  
ば、自ら制しに行かれたり、車掌を呼びつけて注意され  
る等、そばの私共が冷々する事もよくあった。ついでに  
車内での先生の活躍を書きたいところだが、知る人ぞ知  
るという事で割愛しよう。

煙草の次にはお酒の話、先生は酒もおやりにならな  
かった。いつの時代の事か、ある宴会で先生にお酒をす

それ程迄の御心配を先生に強いながらも、コロナグラ  
フの為の新観測所建設の速度は、亀の歩みを下回り、開  
始後既に 6 年を経ようとして、未だ完結を見ず、残す所  
あと数カ月である。「先生、どうしてももう少し待って頂  
けなかったのですか。せめて、コスモスの新観測所が出  
来上る迄。ほんの少し。」とは申し上げない。早く仕上  
げ得なかった我が身の至らなさを恥じるのみである。然  
し、今日も、先生には思い出深いワンカイヨ観測所構内  
では、終日、コロナグラフドームの鉄枠を組み上げる溶  
接の火花が飛び散り、旋盤室からは、一つ又一つと、白  
い金属の間から、ドーム車輪が削り出されて来る。著者  
達は、たとえ時間が掛ろうとも、俺達のは、俺達で  
作ろうと、乏しい材料と貧しい施設に苦しみ乍らも、新  
観測所の設営地コスモスの青空に、純白のドームが浮き  
出す日を夢みている。

「先生、御安心下さい。先生が作って下さった器械を  
自分のものだと思っている若者が、こんなに沢山いるの  
ですよ。」と申し上げて、お別れの言葉にしよう。

(ペルー地球物理学研究所)

めに来た仲居にむかって、「無礼もの」と叱られたという  
神話が伝えられている。しかし私共が知っている先生は、  
自分がお飲みにならないでも、教室の忘年会だ、新年会  
だといっちは自宅にお招きになり、奥様と御一緒に三味  
線をやり、唄をうたわれたものである。先生作詩の天文  
小唄は今も耳に残っている。アラ天文！ 天文！ と。

人をお招きをなるのが好きだった先生は、自宅に天文  
台を建てたからとか、茶庵を作った、弓道場を設けたと  
いっちは招んで頂いた。先生は相変わらず下戸だったけれ  
ど、ある時「私は居酒屋、酒場、スタンド、スナック等々  
何も知らないので連れて行って欲しい」といわれた事  
がある。折角のスポンサー？ 到頭お連れ出来なかったの  
がかえすがえすも残念である。

煙草、酒とつづけば・・・、先生は奥様を本当に大事に  
された。古い「天界」に寄稿されたアメリカ画帖、ヨー  
ロッパ画帖に、若かりし御夫妻の素適な旅装を見る事が  
できる。丁度 10 年前に奥様が逝かれたあと、亡妻を偲  
んで綴られた小冊子を配られたが、先生の奥様への思慕  
の深さをうかがい知るものである。ただ貝原益軒先生も  
顔まげと聞いたことがある。

先生はお仲人をするのがお好きで、日食観測行の回数  
と、仲人の回数が自慢のたね、何人かの天文人もお世話  
になっておられる。私もお頼みに行った時、奥様がお悪  
くて数には入らなかった。

器械いじりが好きであった先生は、アマチュア無線にも興味をもたれ、ハムである私が、この時は失礼ながら師弟さかさまになり、見事国家試験に合格して頂いた。コールサイン JA3HRU の電波が京都の空に飛んで 12 年、ペルー・アンデスに届けたいと意気さかんで、アンテナの建設や、通信料について色々とお話したが、病床につかれる半年前、遂に実現させてあげられなかつたのが悔まれる。

たのが悔まれる。

生駒山太陽観測所も、昭和 47 年 3 月に廃止となり、林立するテレビ塔の奥にかくれ、先生御逝去と時を同じうして取りこわし工事が進んでいた。

初冬の生駒山上、残された太陽塔のむこうに夕陽が淋しく沈んで行く。

## 上田 穰 先生 の 思 い 出

宮 地 政 司

「天文学をやるなら観測ですよ。理論は難しい。誰にもできるものではない。よほど秀れていないとね」と上田先生が言われた。筆者が天文の学生になったばかりのころの話である。10 年先輩の先生の経験やその人生観からのご注意であった。それでも筆者自身は、天文をやるにはまず数学をと、数学に熱中した、だがそれは、長岡半太郎先生の一喝で反省させられた、「数学は道具である。使いこなせば十分なんだ。ハハハ・・・」と。科学の本質というものを教えられたのである。この両先生の言葉は忘れえない教えとして、いまも受け売りさせてもらっている。

関東大震災（1923）のとき、帰省中の筆者は上京できず、2 ヵ月ほど京都大学の宇宙物理学教室で厄介になったことがある。その 2 年まえに、この教室が新設されたばかりだった。当時の教授陣は新城新蔵（後に京大総長）、山本一清（外遊中）の両先生で、上田先生は助教教授であった。荒木先生は卒業間もないときであった。地球物理の志田順先生もおられた。人並はずれて微光星のみえる中村要氏や京都の古跡ならどこでも知っているという某氏などがいて、和やかな楽しい教室だった。

上田先生は元来は東大出身で、いまでいう理学部天文学科の 1916 年卒業である。当時は理科大学星学科と呼んだ。先生は京大にいかれるまえ、暫く水沢の緯度観測所の技師として勤務されていた。所長の木村栄先生、先輩の橋元昌矣先生（後に東京天文台）の許で観測に精進されたが、健康上の都合で京大に転勤されたと聞いた。京大では初め東洋天文学史や暦法の研究に興味をもたれた。とくに石氏星経の研究は有名である。こうした新城・上田両先生の研究は能田忠亮・渡辺敏夫・藪内清の諸先生によって継承され、京都学派の伝統が確立された。

上田先生は学生のころ日食観測に出張されている。以来、日食には関心を持たれ日食に関する著書もある。生駒山太陽観測所を創設され、その所長を兼務され、これが起縁でコロナグラフがペルーに贈られた。

コロナグラフがアンデス高原に完成し活動を開始するまでには、人知れぬ苦勞が続いたが、結局は先生の犠牲によって解決され初志を貫かれたのであった。国際学術協力のためにも、また国際親善のためにも、わが国の政府や天文学界が、もっと援助し協力すべきではなかったか、いまさらのように残念に思うのである。それにしても、先生のコロナグラフがアンデス高原で観測を続ける限り、先生の善意は永遠に生き続き、人々はその徳を偲ぶことであろう。

先生は筆者の親友の長兄にあたる関係で、むかしから、お宅を訪ねてお話を伺ったものである。筆者が天文学科に入学したときは、お祝いにノルトンの星図を頂き、またご夫妻に都踊りに案内され、京の春宵を楽しんだ思出は忘れられない。先生は広い趣味の持主で、独り静かに楽しむ方であった。学生時代に墨染の衣をつけて鎌倉の禪寺で修業されたとかで、仏教に詳しくあった。京都のお宅に茶室をしつらえて点茶を楽しみ、また小舞などうたわれた。ときには三味線を爪弾いて小唄も出た。徳島のお宅でご母堂に点茶と三味で歓待されたことを思い出す。京都の邸内には小天文台を置き、専門を離れて星をながめ、またアマ無線局を設けて全世界と交信しながら、俗塵を避けて独り楽しまれた。最近は学而寮を建て自ら寮長となり、女子学生の世話をされた。先生は一生涯天文を愛し、人を愛し、そして自らを愛された。まことに豊かで悠々自適の人生であった。

先生は有名な愛妻家であられた。その夫人は先年亡くなられたが、その病中先生の看護振りは涙ぐましいものがあり、人々の語り草になっている。先生には 2 人の一高以来の親友があり、この 3 人組の 1 人が奇くも六高で筆者の恩師であり、いまも親しく往来している。1911 年世紀のハレー彗星が出現したとき、3 人組はその偉容に感激し、その再来の 1986 年には 3 人揃って観望することを誓い合われたと聞く。上田先生独りハレー彗星の再来を待たず長逝されたことは、亡き夫人の許へ急がれたのかも知れない。合掌。